



ジャクソンのシネマハウスで会いましょう！

前橋市国際交流員 ジャクソン・バニスターの活動報告

令和8年7月

前橋市のミニシアター「前橋シネマハウス」。映画好きの国際交流員ジャクソンが、支配人おすすめの本を観て、レビューをお届けします。映画は国境を超える！
皆さん、映画館でお会いしましょう！



7月の映画

『トロフィー』

2026年 日本



Jackson Bannister

群馬県前橋市の国際交流員（CIR）として、日本人と外国人との文化的理解を深めるために活動しています。



映画はもう一人の家族

～前橋の街で新たな映画の発見を。地域とつながりを持った映画館を目指します～



映画を通じて家族のようなつながりを地域の皆さんと作っていききたいという思いから“前橋シネマハウス”をオープンすることになりました。小さな映画館ではありますが、前橋の街なかから様々な映画を発信しています。上映が少ないミニシアター系の良作からシネコンで上映が終了したヒット作、お子様と一緒にファミリーで楽しめる作品、過去の名画など様々なジャンルから作品をセレクトし新しい映画を発見してもらえる。そんな“シネマハウス”をつくっていききたいと思います。

MISSION 前橋千代田町五丁目1-16前橋プラザ元気21別館3階

トロフィー

在日コリアンの視点から描く、
繊細で誠実な青春ドラマ。

今回の映画レビューでは、現在前橋シネマハウスで上映中の『トロフィー』を紹介します！

孫明雅監督の長編デビュー作『トロフィー』は、日本で暮らす在日コリアンの少女・ソヒ（恒那）を主人公に描いた青春ドラマだ。ソヒは朝鮮学校に通い、朝鮮舞踊に打ち込む高校生。ある日、日本人の少女・未来（吉澤梨里花）と出会い、K-POP好きという共通点からすぐに意気投合する。二人が行きたかったライブのチケットを買うため、ソヒは父が大切にしていた北朝鮮の勲章——タイトルにもなっている「トロフィー」——を盗み、ネットで売ってしまう。この出来事をきっかけに、物語は大きく動き始める。

一見すると本作は、親から受け継いだものの価値を知らながら成長していく、ごく王道の青春映画のように思える。しかし物語が進むにつれ、その印象は大きく変わっていく。『トロフィー』は、日本映画ではほとんど描かれることのない在日コリアンというコミュニティを通して、「アイデンティティとは何か」を丁寧に掘り下げた作品なのだ。

ソヒは在日コリアンであり、そのルーツは北朝鮮にある。そのため彼女は現在も日本に存在する朝鮮学校に通っている。こうした背景によって、本作は「自分はどこに属しているのか」「受け継いだルーツとどう向き合うのか」といったテーマを、日本映画では珍しい視点から描き出している。

そうしたテーマは、ソヒが情熱を注ぐ朝鮮舞踊とも深く結びついている。日本で生まれ育ちながらも、自身のルーツである「北朝鮮」と結びついたアイデンティティに誇りを持たずにいるソヒ。

その葛藤は、政治的な対立や歴史的背景から北朝鮮に対して強い警戒感が根付く日本社会の中で生きる彼女だからこそその苦しみでもある。この内面的な葛藤は舞踊だけでなく、周囲の人々との関わり方にも大きな影響を与えている。

本作の大きな魅力の一つは、ソヒとミライの関係性だ。異なる背景を持つ二人の友情は、単なる「多様性」や「受容」を訴えるための都合の良い関係ではなく、ごく自然に共通点を見つけながら距離を縮めていく等身大の少女たちとして描かれている。そのやり取りは温かく説得力があり、本作の中でも特に印象に残る要素だった。

演出面では、派手なカメラワークや劇的な構図を避け、まるでドキュメンタリーのように登場人物を静かに見つめるスタイルを採用している。落ち着いた色彩設計とも相まって、作り込まれたドラマというよりも、誰かの日常をそっと覗き見しているかのような自然な空気感を生み出している。

これが孫明雅監督にとって長編デビュー作だということを考えると、その完成度には驚かされる。是枝裕和監督や西川美和監督のもとで学んだ経験が随所に感じられ、演出には新人離れした落ち着きと確かな自信がうかがえる。

キャスト陣の演技も非常に安定している。主演を務めた恒那は、本作が15歳での映画初主演となるが、そんなことを感じさせないほど自然で力強い演技を見せた。演技力によるものなのか、それともソヒと自身の境遇に重なる部分があったからなのか、彼女の存在には確かなリアリティがあり、作品全体をしっかりと支えている。共演には、『ワンダフルライフ』

(1998)の井浦新がソヒの父役、『リリイ・シュシュのすべて』

(2001)の市川実和子ら実力派俳優が名を連ねる。テーマを伝えるためにやや説明的に感じる台詞も一部あるものの、

作品への没入感や感情的な余韻を損なうほどではなかった。

総じて、『トロフィー』は、複数のアイデンティティと向き合い、それらを受け入れていく過程を描いた静かで誠実な青春ドラマだった。ソヒの姿を通して、本作は

「韓国（朝鮮）にルーツを持ちながら、日本で育ち、日本社会の中で生きる」とはどういうことなのかを繊細に問いかける。そして、一見すると相反するように思える二つのアイデンティティは、対立するものではなく、自分自身を形作る大切な一部になり得るのだという希望を描き出している。派手さはないが、スクリーンで語られる機会の少ないコミュニティに静かに光を当てた本作は、そのシンプルなあらすじから想像する以上に、深く心に残る一本だった。